

## 高学年分科会

### 《成果》

- お手本動画を見てグループごとに技のポイントを考えさせることで、技を見るとき視点の視点が身に付き、その課題に対する場を選ぶことができた。(技を見る視点)
- 異質グループを編成することで、児童の関わりが活発になった。(学習班の工夫)
- 基礎感覚づくりの時間に横飛び越しを取り入れることで、おしりを高く上げる感覚、肩に体重を乗せる感覚を身に付けるとともに、跳び箱運動の新たな楽しさを感じていた。(技の工夫)
- 視線を変えることで着地の体の向きが変わるということが分かった。(技の工夫)

### 《課題》

- ICTを活用して、技が「できた」「できなかった」という判断はできていたが、技をよりきれいにするためにはどうすればよいかという考えにまでは達していなかった。
- 「思考・判断・表現」に重点を置いた指導を目指したが、「技能」の高まりを感じる事がなければ、「思考・判断・表現」の伸びも感じる事ができないため、どちらかに重点を置いた指導というわけではなかった。

### 指導講評 東京学芸大学教授 鈴木 聡 先生

- ・学校における新しい生活様式の中でのコロナ禍の子供たち  
→昨年よりけがが増えている。(自粛期間中に運動能力が低下していた。)
- ・グループ編成  
→異質グループの場合、できる子が供給するだけだと思われがちだが、教えることによって、自分自身を客観的に捉えることができる。それが自分の課題発見につながる。
- ・跳び箱 助走から踏切の感覚づくり  
→助走と両足踏切をリズムカルに行う。
- ・着地の感覚づくり  
→両手で体重を支えたり、手で支えたり、手で支えて体を移動できることが前提となっている。

